

編集後記

編集長（ダン シロウ）

■創刊丸三年が経った。年四回、三年で十二号。ますます読み切るのが難しいボリュームの雑誌になってきている。

これは意図通りなので何の問題もない。繰り返し書いているように、この Web 雑誌は対人援助領域のこの時代の資料庫になればよい。

現場の日常はドンドン過ぎ去る時間の渦である。忘却も半端ではない。覚えておきたいと思ったことさえ、忘却の彼方に去ってゆく。

成功も失敗も、喜びも後悔も皆、忘却の対象になる。何度過ちを繰り返したら学ぶのだろう…は愚問である。何度繰り返しても、人は忘れるのである。だから記録が大切なのだ。いや、記録されたものだけが記憶（歴史）になるのである。

当然のことながら資料は記述した者がいる。だから主観である。渦中の記録であるところに嘘はないが、当事者としての思い込みはある。

しかしこれは忘れてしまいたいという意図に基づいた隠蔽や、改ざんとは一線を画している。風化を待つ無自覚な悪意に対抗できるのは、それを阻止する装置である。

■マガジンとしての面白さ、これも大きなテーマである。なにを面白く感じるかは個人の嗜好なので、多様な誌面展開をするのが妥当なところだ。

ページの拡張が問題にならない Web 版だから、一冊の中に複数の雑誌が同居しているような感覚もありである。と、こう書

いていたところに、一番遅れた原稿が届いて仰天した。45ページある。ゆっくり読ませていただきますサトウタツヤさん。

このマガジンは出来るだけ多様に展開したいと願っている。思いのある方からの、連載希望はいつでも受け付けています。編集長にお問い合わせ下さい。

編集員（チバ アキオ）

「人として当たり前のことができない人ほど、当たり前のことから逃げるために特別なことをやろうとする」という言葉をどこかで目にした。ずいぶん乱暴な言い方だと思うが、それだけでは済まされないような気がして印象に残った。心理学の防衛機制でいえば、「昇華」「補償」とかいうあたりでもこの心理的メカニズムは理解できる。自分の意味を感じたいとき、自己証明を得たいとき、自己効力感を考えた時のバランスとして、そう動くのはとても自然な行動選択というのもよくわかる。でも、大きなことをやろうとすることで、うまくいかなくても満足していたり、不安をかき消すかのような自己陶醉があったりというのもつきものである。そして、同じように動かない人への批判も始まる。好きでやっていることではないので、自分はこうやっているのに！という気持ちが出てくるわけだ。

このマガジン各連載のテーマになっている業界でうまくいかない状況では上記のような動きがみられるように感じる。このマガジンでは、日々重ねられていく現場の話が連載されている。この継続される毎日の当り前のなかに丁寧に焦点を当てているように感じている。大きなことにも意味があるが、日々のヒューマンサービス場面にもたくさんの宝物が含まれている。

編集員（オオタニタカシ）

前回の編集会議から3か月。日常はめまぐ

るしく振り返ることもなく過ぎていきましたが、マガジンのことは心の片隅に自然と置かれるようになりました。「次、このことをネタに書けないかな?」とか「こんなテーマで書いてくれる人、誰かいないかな?」といったことがふと心の浮かぶのです。「連載」という仕掛けを与えてもらったことによって、自分の中に起こった変化の1つです。

マガジンの執筆者は発刊を重ねるごとに増えています。自分のフィールドから発信したいと思うことを持っている人たちがこれだけたくさんいるのだという事実が、心を励まし、力を与えてくれます。感謝です。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

印刷版対人援助学マガジン(1号~9号)が少数ですが編集部にあります。ご希望の方はメールでお知らせください。メール便で発送します。

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻12号

第三巻 第四号

2013年03月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第十三号は2013年6月15日

発刊の予定です。

原稿締め切りは05月25日!

常に新規連載者を募っています。

執筆企画をお知らせ下さい。

対人援助学会事務局

〒603-5877 京都市北区等持院北町56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内

TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1
リファレンス内

TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

この絵はマガジンに一度登場している。第三巻の付録マンガ「琵琶湖一週サイクリング」の中の一コマに登場する女子である。(興味があれば、メニュー画面のバックナンバーでご覧下さい)

何でもないようなこのエピソードが、私の人生の中に残り続けているのは、私自身と深く関わっているのだろう。

「先生ずるい、決まりは決まりや!」、こういうことを言って事に向き合おうとする人間が嫌いだ。

公平や公正などに関心があるのではない。自分が損をしていると思ったことに、敏感なだけだ。「それなら、私もさせてもらいたい!」という主張だ。

自分がこういう子どもだった。それを合わせ鏡のように見たのだった。人は簡単には己の正体を変えることは出来ない。努力しかない。